「んっ…それではまた明日、トレーナー君」
「ああ、おやすみ、ルドルフ。」
む、わざとらしく拗ねた顔をする。
彼は苦笑しつつ、両親しか知らない愛称で呼び直してくれた。
ひっそりと、ささやかに。口づけを交わして別れを告げる。
少し物足りないものの、心地よい関係。
正直にもっと踏み込みたい気持ちはあれど、卒業までは我慢しよう。
流石に全ウマ娘の範たろうとするものが学生のうちから乱れる事は避けたい、それが私と彼で交わした合意であった。

布団に入り、一日を振り返る。
有用な事、くだらない事。ぼんやりとした思考の中気がつけば彼の事ばかりが思い浮かぶ。
半ば無意識のうち、唇に指を当て、空いた手は胸に、そして秘所に伸びていく。
「くっ…ふっ…」
声を押し殺し、想像する。これが彼の指であったならばと。
「ぃ…くっ！」
甘い痺れにぶるりと体を震わせ、深く息を吐く。
しとどに濡れた指を見るたび、私はなんとはしたないのだと自己嫌悪する。

「こんな私では嫌われてしまうだろうか。」
小さく呟くと、倦怠感に任せるまま目を閉じた。

ところでウマ娘は、只人とは比較にならない身体能力を持っている。それは臭覚とて例外ではない。
あくる朝、テイオーと共にレースに向かう彼を見送る時、微かに馴染みのない匂いがした。
それは一般的には臭いと分類されるものであるだろうが、不思議と心地よいとさえ感じた。
執務中もそれが頭から離れず、次第に胸の動悸さえ感じる様になる。
ふわふわと脳が地に脚をつけるのをやめた頃、見かねたエアグルーヴに見送られ部屋を離れた。
自分の不調を確かめねばならない、そう言い聞かせて適当な理由をつけてトレーナー室の鍵を持ち出す。
こんな事をするための権力ではないのだがと、冷静な自分をよそに体は動き続けた。

部屋に到着した。中からは朝の匂いが、それもより強烈なものが漂ってきている。
手が震え、鍵を回すことさえ苦労したが、やがて主人を献身的に守る扉はその抵抗を諦めた。
中に入る、喉が渇く、唾を飲み込み、

強烈な渇望と空腹感に突き動かされ、ふらふらとベッド脇のゴミ箱に吸い寄せられる。
果たしてそこには、口を縛られた避妊具が入っていた。彼の匂いしかしないそれは、きっと自慰に用いられたものだろう。臭覚に優れるウマ娘を刺激しにくい為だという理由は後に知ることとなる。
「はっ❤　はっ❤　はっ❤」
息が荒くなる、涎が口内から溢れそうになる。
気づくと右手は茂みに伸びており、触れずとも決壊寸前だったそこはグチュリと音を立てる。
「はぁーっ……はぁーっ……ダメ、だ❤　こんなーーことっ……❤」
白く濁ったその内容物のように、頭の中に霞がかかってくる。
右手が止まらない、止められない、止めたくない。
咥え、舌で転がしながら、浅く絶頂を繰り返す。
「く……イくっ❤イってしまうっ……❤❤」
繰り返すうち、その先端が犬歯で裂けた。裂いた？
ぐにぃ…ぷちゅん
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッ！！！？！？」
口から、鼻から、瞬間電撃が走り、脊髄を焼く、脳が狂う、バカにな

る。
思考は遂に肉体への抵抗を諦め、声にならない悲鳴を上げ、全身から力が抜けた。
苦い、しょっぱい、臭い、どう考えても不快なそれが、たまらなく身を焦がす。
舌で捏ね、舐り、口中に塗り広げる。
ごくり
「っっッ……❤️　あーー……は❤️」
幸せを呑み下す。
制御を失った下半身が暴れ、爪先から尻尾までピンと張り詰めーー崩れた。
数分かあるいは無限に引き伸ばされた須臾なのか、脱力の後口の端から垂れる避妊具をずるりと引き出す。
「…え……ない……」
そこには最早精はなく、それはただ無機質なゴムでしかなかった。
「っ……ぐすっ…」
堪らなく悲しい、涙が溢れる。世界が終わったかの様な絶望に包まれる。彼は、彼は！
よろよろと再びゴミ箱を覗き込み、緩慢に中身を漁る。果たしてそこには……あった！
ぷつりと先端に穴を開ける、今度は大事に使わなければ。

僅かに絞り出したそれを丹念に咀嚼する。時間が経ち粘度は失われていたが、確かな感触が絡みついてきた。
「あ……ーーーっ❤️　ふぅぅぅぅぅぅっ❤️」
呑み込みたい欲求をどうにか退け、唾液と練り合わせたそれを手に吐き戻す。
幾分か量が増えたそれを肌に塗り広げていくと、まるで彼に包まれている様で、あらゆる感覚が曖昧に溶けていく。混ざり合う。快楽だけが走る、奔る、はしる……
「ひぃ……っ❤️　あ゛……❤️」
指、腕、肩、爪先、トモ、全身を彼へ捧げ、遂に胸に到達する。
触れてさえいないのに目の前が真っ白になる、呼吸すらおぼつかない、そして……
「ーーーーーーーーーーーッあ゛❤️❤️❤️❤️」
びしゃり、足元の沼が広がる。
先端に指が触れる、それだけで意識は明滅し、出せるものもない胸の奥がきゅうきゅうと悲鳴をあげた。
胸、疼く、腰、疼く、疼く、腹、溢れ出す。
寂しさを訴え続ける秘所を片手で支え、吐き捨てられた精の残滓を垂ら

し、その結末を見届けてられぬまま私の意識は沈んでいった。

コツ、コツ、コツ
不意に意識が呼び起こされる。
気付かぬわけがない、愛する人の足音なのだ。
帰ってきた。私の、トレーナー君が！
弛緩していた体に力を込める、理性は既に溢れ落ち、最早回収は不可能だ。

部屋の鍵を閉め忘れていただろうか？
ガチャリと逆に閉めてしまったドアを開けなおす。

「ふッ……❤️ ふぅーーーーっ……❤️
おかえり…… ❤️❤️❤️」